
アンラッキー

駄目人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンラッキー

【Nコード】

N61000

【作者名】

駄目人間

【あらすじ】

なあ、みんなファンタジーの世界っていいよな。
でも大体の主人公って運がいいとおもわないか？
俺？俺は………

プロローグ

目の前にはかなり古い遺跡？のようなものが広がっていた。
あれ？なんでこうなったんだっけ？

そう考えて俺、玉野 良はこうなる前のいきさつを思い出していた。

「はあ、どうしようかな」

俺は普通、かどろかは知らないけど高校に通う学生だ。

今は入学したての高校生活4日目だ。

なぜ四日目からで入学式からじゃないのか？

よく聞いてくれた。

マンガとかで不幸体質キャラっているじゃないか、あれにかなり近いんだよ、俺の体質。

だから春になったのに季節外れにも程があるインフルエンザに感染して出てこれなかったんだ。

昔からこんなことばかりおきていて一ヶ月に一回は最低でもこんなことがある。

だから今から始めて学校に行くから困っているんだよ。

ほら、みんなは新しい友達とかいるのに自分一人だけ孤立してるとか嫌だろ？

「はあ、」

今日何回目のため息かも分からないため息を吐きながら頭の中で誰かに俺はぐちをこぼしていた。

「ん？、あれ？」

気のせいだろうか今、目の前がゆがんだような？？

まあ時間がないんだ、さっさと歩こう。

グニャア

おかしいな、また再発症してしまったのだろうか？

そのときいきなり何処かに落っこちるような感覚。浮遊感。

「うおおおお！？」

何故か知らないけど目の前はいきなり真っ暗。

なんだろう意識を失ってしまったのだろうか？その割には頭も冴えてるし浮遊感？落下感？もあるし。

てゆうか吐きそう、ジェットコースターとか苦手なんだけど。

そんな時いきなり目が暗闇以外のモノを写すようになった。

「つきぎぎや!？」

猿？

呆然していると驚いたのか猿は猛スピードで何処かに行ってしまった。

あれ、あんな猿いたっけ？いや、てゆうかなんで道路にいたのに猿？
しかも周りを見渡すとかなり古びた遺跡にいるみたいだし。

普通に考えると夢なんだが不幸センサー的には違うような気がするんだよな。

.....

まてまてまて、そうだ地面を殴ってみよう。

夢って自覚しているときは何でもできるし痛くないしな。

.....痛い.....

まさか、マジでか、これは異世界とかなのでしょうか.....。

.....

よっしゃあああ！

思わずガッツポーズをする俺。

これで全ての困ったことから解放されるっつ学校ともおさらばだ。

確かに親しい人や親にあえなくなるのは悲しいでもそんなことより今は

普通の世界というものから外れることの方がはるかにうれしかった。

それが少し前の俺だった。

よしひとまずこの遺跡を出ようという行動をした俺は忘れていた。

自分の体質を。

「あれ、何で俺この文字が読めるんだ？」

なぜか彫つてある古くなった得体のしれない文字を見て読めることに首をかしげる。

まあ、何でもありだよな異世界っぽいし。

<召還陣レバーを下げる>

周りを見渡すと折れたレバーがあった。まるで何かがなんとなく掴んだら折れちゃったといわんばかりだ。

.....

まさか猿？

……マジか……普通いや、召喚する時点で普通ではないが普通
神様とか勇者になってとか魔王になっ
てとか魔法使いに召喚されるよな……猿って……

でもこんなもんじゃないのが俺の体質だった。

脱出

今、ちょうど俺は遺跡を出てみたんだが今迄で一番この体質をのろったよ。

いままでも別に呪わなかった訳じゃないけど。

え、どうしてか？うふふふふ。

それはね、目の前にジャングルが生い茂っているからなんだよ。

いやあ樹海の中みたいなんだよここ。

いや、マジで。

普通は最初不幸でも次から凄腕の冒険者とか賢者とかに気に入られて助けて貰うとかじゃんか。

実際そんな甘くねえんだよ。

チキショー！主人公に生まれたかった！！こんな不幸体質ではなく！

これから一体どうすればいいんだ。

身体能力が上がってるわけじゃないみたいだしこのままじゃサバイバルできずに飢え死にしちまう。

いや、そのまえに猛獣に殺されるか、猿がいるなら猛獣もいそうだし。

「はあ、どうしよう。」

俺がそんな無意味な独り言をつぶやくと唐突に脳裏でひらめくことがあった。

「そういえば召喚モノのお約束のチート能力とかは？」

この可能性は失念していた。

チートとまでは行かなくても何らかの能力くらいはあるだろ。というかないと絶対死ぬし。

よしひとまず試してみよう、まず物を作る能力から……………

まったく分かん。

ひょっとしてマジで能力ないのか俺？これならまだ何時もの日常の方が良かった。

やべ、急に泣きなくなってきた。

そういえば、＜この能力＞試したっけ？

……………

やった、やった！やった！！

これだよ、これこそが召喚モノのいちばんいいところだよな。

そういえば魔法とかある世界なんかここ？

.....。

できればあるといいよな、どうせこんな体験してるなら。

いやでもあんな装置とか遺跡とかあるなら人間もいるだろうし、たぶん魔法とかもあるだろう。

ひとまずこの能力があるなら大体なんとかなるだろうしここから出て人里を目指そう。

広い。やってられん、まだ出れないってどういうことだよ、もう三時間は歩いてるぞ。

まっすぐに歩いているからそろそろ出ないとおかしいはずなんだが。

いい加減にお腹もすいたし。

そんな感じでつかれきった顔でぼんやり歩いていると赤いりんごのような木の実がなっている木を見つ

けた。

ン？なんだあれ？木の実？ひとまず急いで近寄る。

よく俺が知ってるりんごに似ているんだが体質が体質だけに毒とかある可能性があるしな、とはいえはじめて見つけた食べ物だし。

どうしよう、……………そうだこいつ時は！

頭の中で思いついた考えを実行するために持てるだけりんごを採る。

そして俺はとある作戦を実行するためさっきまで進んでいた道を見失なわないようにうろうろし始めた。

そして少し歩いたとき。

「グガあああああ！」

「やっといた。てゆうかなんだろ、あれ？」

草が、がさがさいうと思っただら目の前に良く分からないオーク？オーガ？よく分からないけどそんな感じの魔物？が現れた。

この世界に来るまでの俺か何の力が目覚めたのか分からないままの俺だったら死一択だっただろうけど約三時間前に分かった力があれば問題ない。

最初に分かるヒントになったのは最初に思いついたものを作る力。

作る力があるなら壊す力もあるのかなと思って使おうとしてみたらつかえた。

狙らったところを破壊する力それが俺が使えるようになった力！

破壊！まず最初に人間なら肘、膝と呼ばれるだろうところを砕く。
(そういえば肘？は4つあった)

「グおおおおおおおおおおお！？」

地面に崩れ落ちる魔物。無様に口を大きく開けてもだえる。

俺はそんな魔物に近づいて持っていたりんごを一つ食わせてみた。

俺が思いついたとある作戦というのは毒見。だった。

……………いやだってそんなくらいしか思い浮かばないじゃん。

ひとまず魔物を観察する。

これでこいつがだいじょぶそうなら、俺もこのりんご？を食べてひとまず体力を回復させる。

……………だいじょぶそうだな。

これでやっと食料が見つかった。俺はそう思うと関節を壊されて苦しんでいる魔物に目もくれずに歩き始めた。

思ったより木の実はおいしかった甘くて個人的にはもといた世界のりんごより断然おいしく感じた。

まあ、お腹がすいてたからかもしれないが。

もう一回りんご？が成っていた木に戻って木の実を食べた分補充しこの樹海から脱出作業を俺は再開した。

ただこのまま行ってもなかなか出られないならばどうするかとおれがとったのは森林破壊にも等しい手段だったそれは目の前に移るものを全て破壊して進むだった。

そのせいで俺が通ったところは竜巻が来たみたいになっている。

でもそのおかげで樹海から出ることができた。

もっと早く思いつけば簡単に出れたのに。

それにしてもかなり使いがってがいいなこの力。

俺がそんな事を考えていると樹海から出て少し進んだところに大きな道があるのが見えた。

脱出（後書き）

何か要望があるとうれしいです

やつと念願の

見たところ割ときれいに整備されている、（当然と言えば当然なんだがアスファルトなんかは使われていない、土がむき出し）道だ。

「やつとこれで人がいそうなところに行けそうだ」

そうばやくと俺はあることに気づいてしまった。

どっちに行けばいいのだろう？さらに人に会えるまでにはどれくらい歩けばいいのだろうか？

……。やばくね？

まずいますまずい！？身体能力が上がっている訳ではないのにこのシュチュエーションはまずい！

どうする俺、どうする！そんな時。

「おいお前こんなところで何をしている！そんな格好でふざけているのか」

そんな声が聞こえた。

日本語？…………、ではないな。

でも俺英語だし、ほかのことはしらないと言っても過言ではないぞ？

なんだろう？翻訳も勝手にしてくれたのだろうか？

「聞こえないのかっ、」

後ろで低い怒鳴り声が聞こえる。よく耳を澄ますと馬車？（いや普通、馬車の音なんて実際に知ってる人ほとんどいないよね？）のようなおともきこえてきていた。

後ろを振り向く。そこには俺の度肝を抜くものが二つあった。

まず一つ目。目の前にはかなり美人のごつい鎧を着た女の人がいた。年齢は18、19、位だろうか。兜は座席にでも置いてあるのだろうなので黒髪のショートヘアと外国人みたいな青い目がよく見えていて思わず見とれてしまった。

二つ目はモデルと比べても遜色ないくらいの美人を前にさらに俺の目をひきつけるものだった。

それは、

鱗がびっしり生えていて鋭い牙と爪を持ち象ほどはある爬虫類のようなものがいることだった。

さらにはつきり言つと

ドラゴンだった。

「マジかよ。」

俺は呆然とそう呟いた。

視点交代

なんだあいつは。徒歩でまさかこんなところを抜けるつもりなのだろうか？

まあ徒歩で行く旅人もいるし非効率的だがそこはいいとしよう。

妙なのは鎧どころか武器すらなくそれどころか何一つ持ってないということだ。

いくらなんでもそれはおかしい、それにここまでどうやってきたというのだ。

ここは、危険度6の注意地域でランクc以上の奴しか入れないはず

だ、仮にあいつがランクc以上だとし
てもいくらなんでも丸腰はありえない。

いったいあいつは何なのだ。

ひとまずあいつが何者なのか聞いてみなくては。

視点交代終了

おいおいどうなってんだ。ドラゴンて、ドラゴンて！

正直その衝撃は言葉が通じることの安堵や人に会えた喜びをどこかに吹っ飛ばしてしまっくらいだった。

「その者聞こえているなら両手を挙げて止まれ！」

ドラゴンの上にのったお姉さん？は、俺に向かってそう怒鳴りドラ
ゴンを下に急降下させてきた。

「うおおおうつ！？やっべ！？」

俺は変な奇声を上げるとつぶされないように地面を転がった、制服
だったか仕方ない（背に腹は変えられないよね？）

「止まれといっただろ！次は火球を打ち込むぞ！」

俺が動いたことが気に入らなかったようで鬼（あまりの仕打ちに次
からこう呼ぶことにした）はドラゴンから降りこっちに右手の手の

ひらを向けて睨んできた。

「わ、分かった。」

いやな予感がかなりするぜ、（冷や汗）おとなしく俺は両手を挙げてなすがままの状態になる。

手は使わなくても力は使えるし最悪、逆に鬼を叩きのめせばなんとかなるだろ。

「貴様はなんでそんな格好でうろついている！ここは危険度6の注意地域だぞそんな格好で死にたいのか！」

そんな事を怒鳴られた時。

「おおおおおうつうつう」

何かの遠吠えのようなものが聞こえてきた。

「く、ひとまず来い！」

それを聞いて顔色を変えた鬼は俺の手をすさまじい力で引っ張りドラゴンの上にあった鞍のようところに俺を乗せた。

え。え？イマナニヤッタ？

「後で事情を聞く！ひとまず離れるぞ！」

そう鬼は言つと手綱を掴みドラゴンを離陸させようとした。

「え、ちよまつ俺高所恐怖しよぎや あああああああああああ
ああああああああ」

俺は最後まで言うことができずに内臓が置いていかれるような浮遊
感を味わいながら絶叫した。

緑に空いた穴

は！ここはどこだ。ぼんやりしていて思いだせない。それに顔に当たる風とこの不規則な動きは？。

そこで俺はようやくはつきりした視界で下を見る。

そこに広がっていたのは広大な大地だった。

思い出した、あいつに乘せられたんだ。………はっ危
うくまた意識がなくなるところだった。

くそっ早く降りなければそう思って震える体を動かす。

「気がついたのか、ずいぶん臆病なんだな」

だが目の前にはおそろしい仕打ちをしてきた鬼のような奴がいた。

うるさいな、だれだって嫌いなものとか苦手なものくらいあるじゃないか！

俺の心の叫びなど無視して鬼は質問を始めた。よっぽど気になることがあつたのだろう。

「さてでは聞きたい事が2つある、なぜお前はそんな薄着であんな危ないところにいた。

それと飛んだときに見えたのだが森の一角が吹き飛んでいたことについて知らないか？」

短刀直入に聞いてきたな。

てゆうか森を吹っ飛ばしてしまっていたのか。そこまでやるつもりはなかったのに。

どうごまかすか考える俺……………よし。これでいこう。

「す、すみません何一つ覚えていないんです。なんであんなところにいたかは僕にも分からないんです」

みたか！この小物臭あふれるすばらしい受け答えを。

この小物っぷりに恐れおおのくがいいさ！

やべ、なんか悲しくなってきた

「そうか、それはすまなかった。……………私は森で起きた異常を至急報告するために一度もどらねばならない、だからお前は少し行けば

つく町までは送って行ってやるだがそれ以上は無理だ。お前はその後どうするんだ」

鬼がしゅっしゅうな顔でそう俺に聞く。（おお割といい性格じゃないか見直したぞ）

そうか、これからどうするか、この世界の金なんかないし当然知り合いなんかいるわけがない。

最初こそ現実世界とおさらばだーとか言って喜んでいたが少し冷静になってくるとなんと厳しい境遇なんだろうか。

どうしよう…。

だが今は一気に心細くなったことなど無視してひとまず必要な情報を聞こう。

「あの、」

「なんだ。」

「おかねがまったくくないみたいなのですが、これでギルドとかに登録できます?」

「何? いったい何がおきたのだお前に? 身一つなんて半端じゃないぞ。」

鬼は大げさなくらい驚いた顔でそう言ってきた。

「それにギルドに金を支払うのは契約クエストか依頼主になるとき

ただだ。常識だろ。」

これはありがたい情報だこれで一応生計は立てれそうだ。これだけ聞ければ用はない。

「あの、何も覚えてなくて、、だからまったく分からなくて、、」

なんという才能！目を伏せてそれっぽく偽装しながら俺にこんなスキルがあつたんだと思わず感心したね。

「あ、そうか、すまない」

「いえ、」

鬼がわるいことをきいてしまったとばかりに表情を暗くして謝る。

「もうひとつききたいことがあるのですが？」

「なんだ！」

さっきの罪滅ぼしとばかりに大声で反応する鬼。

「何でドラゴンに乗ってるんですか」

「ドラゴン？どこに」

いぶかしげな顔できよろきよろする鬼。なんだわざとやっているのか？こんなにちかくにいるのに。

「今俺らが乗っている奴ですよ。」

「は？」

何を言っているか分からないとでも言いたげ顔になると俺らに乗せて飛んでいいるドラゴンを見るとこう言った。

「これは、ワイバーンだぞ何を言っているんだお前？あの凶暴なドラゴンが人間を乗せる訳がないじゃないか」

危ねー！あやうく凄まじい勘違いしながら行くところだった。

そうか、それにしてもこいつワイバーンだったのか。

だがワイバーンで象二頭分くらいなんてドラゴンの大きさは想像もつかないな。

喋っているうちに目的地に近づいていたらしく鬼が指を指した。

「見えてきたぞあれがここの辺で最も大きい町 『グリーンホール』だ」

「うわあ」

鬼が指差したところにあった街を見て俺は思わず声を出してしまった。

そこにあったのは煉瓦で作られた20メートルくらいで作られた大きな城壁で囲まれた町だった。俺の住んでいる所どころか日本、へたすれば俺の世界のどこにある町より

も見事で迫力があつた。

鬼はワイバーンを操って城壁の上で広々としたところに着陸させた。

「すまない私にできることはこれくらいだ。」

「いえ十分です。ありがとうございます」

実際かなり助かったし鬼には感謝している。なんといっても楽にここまでこれた。

「あの最後に名前を聞いていいですか？」

ここまでしてもらった人をまだ鬼と心の中で言うには抵抗があつた。

「ああ、そういえばまだ言っていなかったな君は？」

「俺は玉野、玉野 良です」

一瞬違う名前にしようか迷ったがこの名前にした。

「そうか、私はステファニー、ステファニーだ。」

彼女、ステファニーは最後に笑うとワイバーンに乗って少し離れた所にあつた城壁に行った。

後には思わず見とれて立ちすくんでしまった俺が残された。

冒険者パート1

鬼、じゃなかったステファニーさんのおかげで街までいくことはできたけど俺は一文無しプラス知り合いもほぼゼロこうなると自分ひとりで生きることの難しさを痛感させられるな。

「どうするかなあ」

独り言をつぶやきながら塔から降りる階段を下りる。それにしてもこんなに見事な螺旋階段を作るだけの技術力もあるのか。煉瓦がきっちり置いてあって隙間がまったくない。

そういえば、ステファニーさんがギルドについての説明をしてくれてたっけ確か登録とかには金はいらないって言ってたな。

、、、よし！ひとまずギルドに行ってみよう、他にイクあてもないし、お約束だしな。

そう考えをまとめると俺は長い階段を駆け下りた。

で、

「ギルドってどこだよ!？」

なんだ、いくらなんでもこの街広すぎないか？

しかも、言葉は通じても得体の知れない文字が書かれているだけで文字の意味はさっぱり分らないし。

普通は大きい立派な建物がそうなんだろうけどこの街多すぎてどれか分からないぞ。

誰かに聞くのが手っ取り早いんだろうが俺人見知りだしな！。

おつと余裕でいる場合じゃなかった。仕方ない誰かに聞くしかない、だがしかーしこの場合ここで問題が発生する。

え？問題って何か？それはだねたしかに普通の主人公様達なら逆にフラグにするであろう素敵イベントだよ場所を聞いたりすることは。

だが、なにか忘れちゃいませんか？具体的には俺の体質とか。

大袈裟だとか言った奴に教えてやる。

俺は今まで生きていた中で二回道をきいたことがある。

一つ目は優しそうなお兄さんに、だがそいつに俺はいつの間にか財布をすられていた。

しかもこの時ちょうど正月が終わったところでお年玉まで持っていた。この時れのへこみっぷりは半端じゃなかった。

二つ目は俺の友達？なんだがあいつに聞いて以来何度も何度もしつこく俺にまとわりついてきてかなり大変だった。

まあ、とにかくこんなことがあるからかなり真剣に聞く人を選ばないと大変なことになるのだ。
さてどうするか。

待てよ。

わざわざ聞かなくても冒険者っぽい人の後を付けたらどうだろうか？

その人が入ったところを見てみればそのうちギルドにあたるんじゃないの？

流石だな俺。勉強しないで本ばかり読んでいたことだけある。（自画自賛）

よし、ひとまず冒険者っぽいあの女の人にしよう。剣に鎧あと袋を持っているし十中八九冒険者だろ。

それにしても女の人の冒険者率高いな。

それはそれとして後をつける俺。

しかしやることなすこと全て予想してなかったことになる才能はここまで考えても発揮されることをまだ俺はしらなかった。

「貴様なんの目的があつて私をつけているのだ？ 言え！」

今現在俺は路地裏で剣を首筋に押し付けられている。

え？ 何でこんなことになったか？ それは少し前にさかのぼる。

ふむ、中々ギルドに向かおうとしないな。むしろ人ごみのない路地裏に来てしまった。

何か目的があつてここに来てるのかな？ その時。

「いい加減出てきたらどう？ 何の目的か知らないけど」

なに、ばれたというのか、流石に冒険者は普通の人と違うな。そう
思つて出て行こうとしたその時。

「中々できるなあんだ」

いきなりそんな低い男の声。そして

何人かの黒ローブを着たあやしげな集団が音もなく小さな隙間や屋根の上からいきなり現れた。

俺はいきなり現れた暗殺者じみた奴らにかなり驚いたが女の冒険者は知っていたかのように男に問いかけた。

「なんだ貴様ら？誰に頼まれた」

「ふふ、そんなこと言うわけなかるう信賴が命の世界だ。それより一つ聞きたいのだから私たちが分かった？」

「この世界で生き延びたかったら殺氣くらい分らないと生きていけないぞ。貴様らもそれくらい分かるだろう？」

「まあな」

なんだこの人達怖ー人間じゃねえよ絶対。まあそれでも俺が見つかったわけじゃないみたいだな。はあ、それにしてもせっかくあんなに考えたのに厄介ごとに巻き込まれるなんて。

「さてでは申し訳ないが死んでもらうぞお姫様。」

そういうと黒服のボスらしき男が右手をそれにかざす、それを見て後ろに控えていた黒服たちが一斉に襲い掛かった。

やべえ、このままじゃ女の冒険者が殺されてしまう流石に目の前で女の子を殺されるのわ見たくない。

しかたないこうなったら俺の力で、、、あいつらを吹っ飛ばす！

そつえば道を作るときに木を力で吹っ飛ばしてどのくらいまでのことができるか確かめた。

それでいくつかが分かったことがある。

俺の力は指定した50センチ平方メートルのところにあるものを問答無用でぶっ壊すという力であることが分かった。葉っぱだろうが幹だろうが土だろうが壊せたから強度はあまり関係ないということ。

もう一つ分かったこと、これは弱点だけど同時に指定することができるのは8までという事、それと自分を中心とした半径150メートルの円の中しか指定できないということだった。

だ、け、ど、今俺にデメリットは関係ない黒服の数はボスらしき男を合わせても7人、俺が同時に倒せる最大人数は八人、数的に余裕だしさらにまだ俺には誰も気づいてないとゆうメリットがある。

まずしっかり目標を指定する、その後、一気に能力を発動する。

くらえ発動！そのとき襲われている冒険者を見る。ン？あの冒険者よくみると笑ってる？なんで？俺がいなかったら殺されてるはずなのに？どういうことだ？

だがそんな疑問など関係なく俺の力は発動してしまっていた。

「「「ぐああああああああああああ」」」

吹っ飛ぶ暗殺者(?)達。

俺の力をくらって暗殺者らしき人達は全員気絶してしまった。

なんだろ、冒険者が笑ってたのは気になるけどいいやひとまずこれで恩も売れたと思うし案内してくれそうだからあってみよ。

「おい、あん」

俺がおい、あんたといおうとして途中でやめて最後まで言わなかったのはさっきまで囲まれていて圧倒的に不利だった冒険者が俺の首に剣をつきたてたからだった。

「貴様何者だ？」

えー俺助けてあげただけなのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6100o/>

アンラッキー

2011年10月7日20時40分発行